

グローバル人材としてのキー・コンピテンシーを獲得させる 中等教育カリキュラムの開発

- ◎若宮知佐 (東京学芸大学附属高等学校国語科)
○安井 崇 (東京学芸大学附属高等学校地歴公民科)
粕谷恭子 (東京学芸大学人文社会科学系外国語・外国文化研究講座)
見世千賀子 (東京学芸大学国際教育センター)
渡辺雅之 (東京学芸大学芸術スポーツ科学系養護教育講座)
李 修京 (東京学芸大学人文社会科学系外国語・外国文化研究講座)
篠田英朗 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院)
遠藤 元 (大東文化大学国際関係学部)
加納隆徳 (帝京大学教育学部)
山北俊太郎 (東京学芸大学附属高等学校地歴公民科)
小太刀知佐 (東京学芸大学附属高等学校地歴公民科)
久野あゆ美 (東京学芸大学附属高等学校英語科)
日渡正行 (東京学芸大学附属高等学校国語科)

代表者連絡先 chisawa@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 グローバル人材育成 高大連携 カリキュラムマッピング 平和構築 合意形成

1. はじめに

複雑化する国際社会を生きることになる高校生に、グローバル人材としての資質・能力を涵養することが求められている。本研究では附属高等学校の生徒の現状を踏まえ、グローバル人材たるキー・コンピテンシーとして「課題探究力」「語学力」「合意形成力」を設定し、これらを育成するべく大学と連携して4つの実践を行った。

2. 目的

附属高校の1年生(62期生)全員に意識調査を行ったところ、「高校時代に海外留学/研修をする予定である」が11%、「大学時代に海外留学/研修をしたい」が53%、「将来仕事でグローバルな活躍をしたい」が42%という結果が出た。これは、文部科学省の調査(「若者の海外留学を取り巻く現状について」平成26年4月)を参照すると、全国平均よりは高い値であるが、学校種別の結果が示されている調査(文部科学省「平成25年度高等学校等における国際交流等の状況について」)を見ると、全国の国立学校としては低い値である。62期生への同調査で「高校時代に海外留学/研修をしたいが実現は難しい」(43%)「大学時代に海外留学/研修をしたいが実現は難しい」(20%)と答えた生徒に「難しくしている阻害要因」を答えさせたところ、「語学力の不足」をトップに「家庭の経済的事情」「大学進学に不利」「海外で自立して生活することに不安がある」などの回答があがった。附属高校でグローバルに活躍したいという意欲がさほど高くなく、また実際の行動となって現れてこない背景には、外国語の実践的な力が不足している(と生徒自身が感じている)ことや、大学進学や社会生活との接続への不安、グローバルな場に参画することへの自信不足等があると考えられる。

このような分析を踏まえ本研究では、生徒の実践的な「語学力」、課題を発見し解決する「課題探究力」、他者と協働するための「合意形成力」を重点的に育成することで、生徒にグローバルな場に参画する自信・意欲をつ

けさせたいと考えた。東京学芸大学や東京外国語大学と連携してアジア言語講座や「平和構築」ゼミナールを開講し、同時に、それらの取り組みで育成する力と通常の教科教育で育つ力とが循環的に高まっていくよう、学校全体のカリキュラムを構造化する。大学との連携によるプログラムで、国際社会への深い関心やバランスのよい世界観、多様な他者と協働するマネジメント能力、実践的な英語力といったグローバル・コンピテンシーを育成するとともに、それらが日々の教科科目の学習や将来の社会生活に連続していることを生徒に自覚させ、自信を持って世界に参画できるグローバル人材を育成する。

3. 実施状況と分析

3-1. 課題探究型カリキュラムの構造化

すべての教科が連携して課題探究型カリキュラムの改善を行った。各教科で既に行っている課題探究型授業をマッピングして整理したというものである。本校は従来から「探究型授業」「協働学習」「発表学習」が多いのが特徴であったが、教科間で連携が取られていなかったため、内容に重なりがあったり段階的に力が付くようになっていなかったりといった問題があった。そこで、月に2回程度の教員ミーティングを開き、全教科の授業内容を共有した上で育成している能力別に整理していく作業を進めた。並行して、校内教員研修会（名城大学教授 池田輝政氏「ラーニングアウトカム概念とカリキュラムマッピング」）を開いた。

下に示すのは（図表1）、「探究型授業」「協働学習」「発表学習」が多い科目の1年生の授業の様子である（スペースの関係で1学期分のみ示す）。これを検討する中で、例えば、理科と地歴科がどちらも1年生の1学期では「事象の観察」に、2学期では「事象の分析」に力を注いでいることがわかった。そこで国語（現代文）や数学でそのような理科と地歴科の授業をサポートするような内容を導入し、より効果的に学力が付くようにした。また例えば、「プレゼンテーションのやり方」について、国語（現代文）と情報とが1年生の2学期にほぼ同じ内容の授業を行っていることがわかったため、時期をずらして内容が発展的に習得されるようカリキュラムを改善した。

図表1

		4月	5月	6月	7月
学習内容(単元)					
「実習・活動のタイトル」		「〃左右。を説明しよう！」	「羅生門を読む」	「200字に縮約しよう」	
育成すべき内容(学習内容/評価)①	現代文	日常にひそむ不思議を探究しようという意欲をもつ 相手に伝わるように思案内容を表現する	本文に根拠をおいた読みを行う 論点を整理しつつ話し合う 話し合い内容を記録する	論理的文章の構造を読み取る 要約文を書く 200字という日本語の単位について理解する	
育成すべき内容(学習内容/評価)②					
課題の表現方法		A6寄綴への記述	ワークシート	要約文(200字原稿用紙)	
育成すべき内容(学習内容/評価)	地 理	地図の図法 「地形図の読図/主題図の作成①」 地形図の作成を通じて読図の技能を高める 地形図の基本的事項(地形)がわかる	地形図の活用・地域調査 「野外調査・フィールドワークの実践」基礎 野外調査を通じて地理的な見方・考え方の獲得 土地利用調査を通じて都市の機能を考察する スケッチや断面図の作成を通じて観察する	都市の内部構造/東京の地形	都市と村落/東京の地形
関心・意欲・態度 思考・判断・表現 技能 知識・理解		25000分の1地形図の投影図作成(GW宿題)	地理実習・レポート冊子		※読図の練習
育成すべき内容(学習内容/評価)③(履修割合)	日本史		地理実習事前授業(平成28年度未実施) 「江戸・東京の都市形成」 東京の土地利用や地形に関心を持つ 現在の土地利用と歴史や地形の関係を考察する 古い地図と現在の地図を比較する		
関心・意欲・態度 読む能力 書く能力 話す・聞く能力 知識・理解			ワークシート		
	生 物	「細胞の観察」 ミクロメーターの使い方やスケッチの仕方が分かる 観察結果をもとに考察することができる	「細胞の観察」 ミクロメーターの使い方やスケッチの仕方が分かる 観察結果をもとに考察することができる	「DNAの抽出」 実験操作の意味を考えて表現できる 生物の共通性について説明できる	遺伝子とその働き
	地 学	レポート 地球の形状 「地球の大きさを測ろう」 測定の方法が理解できる 丁寧に歩測することができる 工夫して目印を捜すことができる ワークシート	レポート プレートテクトニクス	ワークシート 「偏光顕微鏡観察」 等粒状・斑状の区別ができる 数種類の特微的な鉱物の判別することができる 点描で丁寧にスケッチすることができる ワークシート	岩石・鉱物・火成岩 「岩石観察」 比較して、特微を見いだすことができる 欠かすことなく、特微を表現することができる 知識を統合し、論理的に特微を分析することができる レポート
	保 健	現代社会と健康 「健康の考え方、すがた」 自分の生活の問題点を探ることが出来る。 健康が成り立つためにいろいろな条件があることを知る	現代社会と健康 「生活習慣病」 生活と健康の結びつきを理解できる。 生活習慣病を予防する態度を養う。	現代社会と健康 「食事と健康」 食生活が身体作りに与える影響を理解する。 現在の日本の食の問題点を知る。 食生活をよい方向に変えられる。	現代社会と健康 「運動・休養、応急処置」 「運動・休養が身体作りに与える影響を知る。 睡眠の大切さを知り実践できる。 日常起こりうるけがの処置について知る。 健康の記録・授業ノート提出
	情 報	通信通信ネットワークとコミュニケーション 「電子メールの仕組み」 電子メールの仕組みが理解できる。 ネットワーク上のコミュニケーションにおける問題を解決できる。 TUJ/CSJ/SJISの仕組みの他(日本語・漢字・英語)の文字コードがわかる。 ワークシート、電子メール	情報の活用と表現 「Gimpを利用した画像処理」 画像に関する権利について理解できる。 著作権や肖像権を認識し、画像処理ができる。 写真の伝えるメッセージを考え、表現できる。 ワークシート、jpgファイル	情報の活用と表現 「林間学校の名札制作、作曲」 デザインとは何かを理解できる。 デザインの目的を言語化できる。 ドローとイベントの特性を理解できる。 ワークシート、AppleWorksデータファイル	情報の活用と表現 「知的財産権」 著作権について理解できる。 産業財産権について理解できる。 身の回りの知的財産について気にすることができる。 ワークシート

このように、全教科科目の教員でカリキュラムを整理することで、全体として授業時間に余裕が出たり、学校として目指している学習成果が明確になるというメリットがもたらされた。生徒にも「課題・レポート」と「行事」のスケジュールを示すことで、見通しを持って学校生活を送らせることができるよう

になった。さらに、学校全体のラーニングアウトカムを見据えてマザー・ルーブリックを作成し、各教科での課題に対する評価についてはマザー・ルーブリックをローカライズして用いることで学力観の整合性を図るようにした。

3-2.アジア言語講座他

本校はタイ王国から 40 年間にわたり留学生を受け入れており、また学習旅行の行き先の一つとして韓国を設定していて、生徒たちに東アジア・東南アジアにおける日本のあり方を考えさせたいとの教育意図がある。グローバル言語としての英語力伸長と並行して、地域語としてのタイ語・韓国語を学ぶ機会を設けたいと考え、平成 26 年度より「アジア言語講座」を開講している。平成 27 年度は、李修京准教授の推薦により本学韓国留学生 CHUNSEEUN 氏を講師として招き、9 月 9 日(木) 9 月 30 日(水) 10 月 7 日(水) 10 月 28 日(水) 11 月 4 日(水) の放課後に希望者対象の韓国語講座を開いた。11 月中旬に学習旅行で釜山へ行くことを見据えて、韓国語で簡単な挨拶ができるようになること、言語への理解を通して韓国文化の理解を深めることを目標とした。

タイ語講座については、東京外国語大学でタイ語タイ文化を学んでいる大学院生 福富渉氏を講師として招き、計 12 回の講座を開いた。言語は短時間で繰り返し学んだ方が身に付くとの講師の方からの言語学的知見と、複数回に分けることでより多くの生徒が講座に参加できるようにしたいという運営生徒の思いから、今年度は、講座を 2 展開とすることにした(図表 2)。

図表 2

	火曜日コース	水・木曜日コース	内容
第1回目	9月15日(火)	9月10日(木)	タイとはどのような国か、また「言語を学ぶ」とはどういうことかについてワークショップ、音節の仕組み、発音、声調
第2回目	10月6日(火)	9月16日(水)	語尾、基本語順(肯定文)、自己紹介の練習
第3回目	10月27日(火)	9月24日(木)	基本語順(否定文、疑問文)、数詞、会話練習
第4回目	11月17日(火)	10月8日(木)	修飾表現、BE 動詞、会話練習
第5回目	11月24日(火)	11月12日(木)	こそあど、存在を表す表現、タイ文字
第6回目	12月1日(火)	11月25日(水)	「～したい」、可能・許可、確認の表現

今年度のアジア言語講座の成果としては、まずは生徒の側から種が蒔かれたこと(生徒が英語以外の言語を学ぶ必要性があると感じたこと)、種を広く蒔きより多くの生徒に花を育てる機会を提供したこと(開講回数を増やしたこと)、そして他の生徒が蒔いた種から立派に花を育てた生徒が少数ではあるが現れたこと(興味を持った生徒が講座をうまく利用して自分の可能性を広げることができたこと)である。タイ語講座参加者の中に 6 回全ての講座に意欲高く参加した一年生男子生徒がいた。タイ国留学生と同じ部活に所属しており、その友人と母語でコミュニケーションしたいという内的動機付けが非常に強く、家で毎日復習を行っていたとのことである。その結果、発音や簡単な挨拶の仕方はもちろんのこと、100 語以上の単語をマスターし、自分で新規の文もどんどん作れるようになり、文字も書けるようになった。講座終了時点では「もっともっと話せるようになりたい。来年度も、語学講座としてタイ語上級コースを作ってもらえるとありがたい。もし講座開講が難しいとしても、今後も勉強し続けたい。」との感想を残している。

3-3.グローバル・カフェ(外国人留学生との交流)

「越境」をキーワードに、様々な国籍の外国人留学生を学校に招き、日本語あるいは英語でディスカッションする場を設けることで国際理解と日本理解をバランス良く備えた人材を育成したいとのねらいで始めた企画である。平成 27 年度の具体的な活動内容としては以下のようなものがある。

日程	タイトル	講師	参加生徒数	使用言語
9月28日	「ドイツ人日本学研究者が語る日本」	ハンブルク大学ドイツ人研究者	35名	主に英語
10月16日	グローバルカフェ×外務省	外務省外務事務官	12名	日本語
11月4日	「韓国人留学生と語ろう！」	東京学芸大学留学生 2 名	8 名	日本語
11月25日	「タイをもっと知ろう！」	東京大学在学中のタイ国生	11名	日本語
1月15日	「韓国人留学生と語ろう！②」	東京学芸大学留学生 3 名	19名	日本語
1月22日	「海外進学の薦め」	海外大学在学中のOG	8 名	日本語
2月24日	「外国人留学生と語ろう！」	東京学芸大学留学生 9 名	24名	主に英語

これらの取り組みの中で特に印象的だったのが2回の「韓国人留学生と語ろう！」企画である。参加した本校生徒の中には韓国に対してある種の先入観を持っている生徒もいた。しかし、講師として招いた韓国人留学生の人柄と見識の高さ、包容力によって、相手国への見方ががらりと変わる様子が見られた。東京学芸大学では平成 27 年度から留学生センターが中心となり、昼休みを活用した欧米やアジアの留学生との交流会や個人的な会話練習のパートナーを紹介する「学芸カフェランチ講座」が開講されている。意欲があっても日本人学生や学外の日本人コミュニティとの接点を持てずにいる留学生と外部とをつなごうとするこれらの企画は、本校のグローバルカフェと通じる点が多く、今後はますます連携していきたいと思う。

3-4.「平和構築」ゼミナール

「平和構築（peace-building）」とは、戦争から平和への移行期にある国や地域を支援する活動を意味する。その解決には軍事的な分野だけではなく「政治」や「社会」「経済」などの多面的なアプローチが必要とされ、紛争の背景には多く「歴史」や「資源問題」が絡んでいるため、歴史的・地理的な見方を養うことなしにはこの問題は解決できない。「平和構築」について主体的に学び続ける場を作ることで、生徒の「合意形成力」を高めようという取り組みである。平成 27 年度にはこの分野の第一人者である東京外国語大学の篠田英朗教授の指導のもと、東京大学公共政策大学院の華井和代特任助教、帝京大学加納隆徳講師の協力を得て、希望生徒 30 名ほどを対象に通年の「平和構築」ゼミを実施した。篠田先生によるワークショップの後、加納先生による貿易ゲーム授業、華井先生による模擬国連安保理の授業、本校公民科教員による「人道的介入」の是非を政治哲学の言説から分析的に考えさせる授業、世界史の教員による日本とドイツの歴史教科書についてのディスカッション授業などを行った。この成果は大きく、ゼミが終了した後も生徒同士で平和に関する議論を続けている様子が見られる。生徒たちは、平和に対して関心が高まっただけでなく生徒同士で議論することに意義を感じている。また議論の中身も、より問題の「構造」を追求するようなものになっている。

4. 今後の課題

2ヶ年に涉った本研究は、まずは附属高等学校の「土曜日探究授業」のかたちで結実した。上記の「アジア言語講座」「平和構築ゼミナール」「合意形成講座」を吸収して、生徒たちが課題探究に取り組むことで「課題探究力」や「合意形成力」が涵養されるようなプログラムとして、平成 28 年度より月に一回ペースで土曜日授業が実施されている。これに関しては、土曜日探究授業を通して生徒がどのように変容したか検証していく必要がある。平成 27 年度に「課題探究力」を測るルーブリックを作成した。現在はこれに基づき生徒の能力を評価している段階である。プログラムのインとアウトで評価していくことで、生徒がどのような変容を見せているかを蓄積していきたい。

本研究の二つめの成果として、外国人留学生の頻繁な来校というかたちで東京学芸大学との連携が進んだという点がある。平成 28 年度からはさらに、英語の授業に継続的に外国人留学生を招き、グローバルイシューについて

て英語でディスカッションする場を設けることになっている。また、グローバルカフェも年間の計画的なイベントとして実施していく予定である。これに関しては、取り組み目的を一層明確化すること、留学生の方にとってのメリットを高めていくこと、また行き帰りで事故があった場合などにどのような対応を取るかといった現実的な問題を解決すること、といった課題が残っている。

現在、グローバル社会を生きていくための汎用的スキルを育成するためには校内での教育だけでは十分ではなく、大学をはじめとした外部機関と連携してチームで子どもを育てていくことが求められている。本研究で、そのような外部連携のシステムを構築することができた。今システムをより洗練していくことと、生徒の変容をきめ細かく測り指導の改善に生かしていくこととを、今後の課題としたい。